



= 農政の視点PART V =



— 松坂正次郎 —

目次

「尾灯」について……………	著者……………	1
「尾灯」二〇〇編……………	著者……………	2
○一九八三年……………	五編……………	2
○一九八四年……………	三編……………	7
○一九八五年……………	四編……………	13
○一九八六年……………	二編……………	14
○一九八七年……………	一編……………	16
○一九八九年……………	二編……………	17
○一九九〇年……………	五編……………	19
○一九九一年……………	八編……………	24
○一九九二年……………	三六編……………	32
○一九九三年……………	二九編……………	68
○一九九四年……………	三〇編……………	96
○一九九五年……………	二八編……………	126
○一九九六年……………	二九編……………	154
○一九九七年……………	……………	183
わがナビゲーター……………	山田民雄……………	201

尾灯

「尾灯」について

コラムを「尾灯」、つまり、テールランプとしたのは、先行きを照らす「前灯」といった気構えではなく、列車や自動車の最後尾にあって、安全な進行にいくらかでも役に立てればといった気持ちの現れと見ていただきたい。もっと言えば「前衛」ではなく「後衛」であるという程度の思いを伝えたいということでの名付けである。

私がNOSAI全国の広報部長の頃（昭和五十三年七月）、『農業共済新聞の三〇年』（昭和二十三年〜昭和五十三年）を刊行したが、その中に「広報事業長期計画素案」を提示し、「広報事業発展一〇カ年計画」を示し、新規開発事業として「レポート『農政と共済』の発刊を掲げていた。農業共済の管理職者（組合長・参事・部長・管理者）市町村長・事務局長ら）を対象にした週刊誌の雑誌スタイルである。

これは幸い目論見通り昭和五十三年九月に陽の目を見た。当初はB5判・八ページでスタートしていたが、昭和五十七年に私が総務部長から講習講師室講師となり、更に株式会社「ナイア」に移り、協会から『農政と共済』の編集一切の委託を受け、先輩で畏友の丹羽敏明さん（私より一期前の総務部長）がワープロを受け持つことで再発足した。八ページでは「共済」の日常的な情報は伝達できても、激動のさなかにあった農業・農村・農政の動向を報道することは不可能であったから、おおむね一二ページを増ページし、それらをフォローアップすると同時に、コラム『尾灯』を設け、私の個人的な考え方を自由に表現できる欄を確保した。創刊（昭和五十三年九月）から現在（平成九年五月二十七日で八七七号）までに一八年を経ている。「尾灯」の掲載数もおそらく八〇〇を超えているはずである。

ある時は、時の流れに竿をさし、ある時は流れに身を任せてきたし、内容もまた玉石混淆どころか、泥石混淆といったところである。それに自分では自己満足している部分もあるので、厳しい読者の代表として、学友であり、かつ親友の山田民雄さん（劇作家・農水省農業者大学校講師、朝日カルチャーセンター自分史講座講師など。戯曲『北赤道海流』で、小野宮吉平和賞を受賞）にセレクトの労をとっていただいた。多分、大いに苦労されたにちがいない。彼の励ましがなければ、「尾灯」は続けられなかったにちがいない。（多謝）

わがナビゲーター

山 田 民 雄

もともとは「日本球場」の記者席か解説者席にいる人なのだが、記事を書きながら、しげしげと内野席の最前列まで出て行って「農民チーム」のために懸命に声援をおくる。

松坂正次郎さんはそんなふうなんだ。

外野席応援団員の一人にすぎないわたしは、これまでこの熱烈な先輩リーダーに引っ張られ、「農民チーム」の助っ人としてのあり方について多くのことを教わってきた。ひところの『農業共済新聞』のコラム「防風林」は、いわばそのテキストみたいなものだった。ここにまとめられた『農政と共済』の「尾灯」もまた、わたしにとってはたいそう大事な教本なのである。

*

「尾灯」は、一言で言うなら、農民の立場に立った農政時評である。その特長は、戦後、とくに高度成長期以後、日本の農業と農村をグジャグジャにしてしまった「元凶」である「ノー政」、そしてしばしばその露払い役を演ずるマスコミへの容赦ない批判にある。グジャグジャの度合いがひどくなるにつれて、筆鋒も鋭さを増している。

また、視点は農村の現場にも向けられ、足が地についた地域づくりや、新しい経営の試みを掘り起こして称える一方、農民、農業団体、村落共同体の弛みもきびしく指摘する。

わたしはこの時評のおかげで、その時々の農業・農村・農政の実相と問

題のあり方を教示され、わたしなりの応援の仕方を考えることができた。その点で「尾灯」は、テールランプどころか、不勉強なわたしのナビゲーター役となってくれていたのである。

それだけではない。「防風林」とその続編である「尾灯」をつなげて、わたしは「もう一つの戦後日本農業・農政史」と言えるようなものとして読ませてもらっている。さらに言うなら、「尾灯」がしきりと点滅させる明かりは、まぎれもなく現代社会の病徴を知らせるシグナルであると受け止めている。それはそのまま二十一世紀への、あるいはまた新農業基本法へむけての提言でもあるのだ。

*

十年ほど前からだろうか、「尾灯」は少し色合いが変わった。というより、力点のおきどころが微妙に移行したといったほうがいいか。

農業・農村・農政全般への時評は従前どおりつづけられるのだが、とりわけて「農・食・教育」への論及が多くなってくる。いうまでもないが、「農・食・教育」はこの国の「繁栄」、裏返して言うなら歪みを象徴する分野といえるだろう。松坂さんはそこへ、しつこいくらい幾度も踏み込んで、その歪みを質す。それが一つ。

もう一つは、やはり同じところから、農政時評の域を越えた「社会・文化時評」の比重が大きくなってきたことだ。政治、経済、マスコミ、教育から、環境、生活、スポーツ・芸能・風俗にまで及ぶ。

つまり「尾灯」の視覚がぐんと広がったと言ってよかろう。時代の要請でアンテナを高くしなければならなかったのかも知れない。が、これはわたしの推量だが、ちょうどそのころ松坂さんが旗頭となって、居住地の船

橋市ではじめた「農と食と教育を考える集い」の活動と無関係ではあるまいと思う。この「集い」は、生産者と消費者が連携して学習するれっきとした市民運動である。そこでの経験がモチーフをふくらませ、誌面に反映していったのにちがいない。

奇態なこともあるもので、松坂さんが眼を病んだのもほぼ同じ時期からだ。年々、読むことも書くこともままならなくなっていったようなのだが、「尾灯」はむしろ次第に透明度も熟度も増したとわたしは見ていた。昔の人なら、こういうのを「心眼を開く」とでも言ったことだろう。ともかく九〇年代に入って、「尾灯」は明らかに脱皮した。

*

愚痴めいて恐縮だが、約八〇〇編の「尾灯」から二〇〇編を選びすぎる作業を託され、正直いって往生した。膨大な量もさることながら、それよりも本書に収載するにふさわしい文章が多くて困ったのだ。これとは思つものに付箋をつけていって、数えてみると三〇〇をこえている。で、余儀なく再読する。難行である。

が、読み直すうちに、なにやらうれしくもなった。とにかく、合格点をつけられるものがざっと四割。オリックスのイチロー選手以上の好打率ではないか。すごい。

わたしはあらかじめ選択の基準を二つ決めていた。一つはアクチュアリティー（現実性）。要するにいま読んでも古びていないもの。斬新さ、先見性だ。

余談めくが、実はわたしも『農政と共済』の「灯影」欄に月一回短文を書かせてもらっている。ごく軽くちょっぴり辛めの文化時評といったもの

だ。ところが、「尾灯」を通読してみると、それなりにうまく書いたつもりなのわたしの文章の主題も題材もとくに先取りされているのがいくつもあって、これには恐れ入った。

いま一つの基準は、文章の味である。これはかなりわたしの好みがあるから、あまりとやかく言えないが、松坂さんの文章に独特の強さがあることを改めて知った。ボンベから吹き出すガスのように、あるいはたぎる湯のように、勢いがあるて熱い。それが小さな器にあふれんばかりに盛りこまれているのである。これもすごい。

*

原稿用紙にして二〇〇枚の「尾灯」。一八年間の各週、全く休載なしに書きつづけている。その持続する筆力をささえてきたものは何だろうか。

「農への愛」。そんな言葉が真っ先に思い浮かぶ。交響曲に流れる通底奏音のうように、「尾灯」全編からわたしはそれを感じとる。

「愛」などと言うとご本人が嫌がるかもしれないが、それならばひっくり返して、農をおとしめ、ないがしろにするものへの「怒り」と言い換えよう。

いや、「愛」とか「怒り」とかいう言葉ではどうも不正確で、単純すぎるようだ。そこでもう一つ言い換えると、「戦後民主主義×農本主義×ロマンチズム」といったものになりそうだ。むろんこれはわたしの勝手な考えにすぎず、少々乱暴な言い方だとも思うが、「尾灯」を持続させたエネルギー源をさぐっていくと、そういうところへ行き着くのである。

— 農政の視点 PART V —

発行 平成9年9月15日 定価 1,200円
(消費税込み)

著者 松坂正次郎

発行所 ㊤102 東京都千代田区一番町19

NOSA I 全国会館内

株式会社 ナ イ ア

☎03-3264-2978

〔制作〕ソフト企画

〈著者略歴〉松坂正次郎

1947年に全国農業共済協会に就職、主に農業共済新聞の編集に従事、新聞編集長、広報部長、総務部長などを歴任、現在、週刊『農政と共済』の編集に従事。農政ジャーナリトの会、農業情報研究所、山崎農業研究所、有機農業研究会などに所属。